

【主題】認め合い、助け合えるクラスの育成を目指して

【副題】学級活動を活用した長なわ跳び大会を通して見つめた児童の成長

【学校・団体名】多賀城市立山王小学校

【役職名・氏名】教諭 佐々木 美咲

1 はじめに

昨年度、筆者は小学校3年生の担任をした。3年生という時期は高学年や低学年ほど注目されないが、周囲との関係作りにとって重要なカギを握る学年である。

筆者が担任したのは3年3組であり、29名の児童が在籍し、交流学級の自閉・情緒学級在籍児童2名も、国語や算数以外の教科を一緒に学習していた。

筆者のクラスは自分の思いや気持ちを言葉で適切に伝えられる児童も多く、休み時間には外で遊ぶ児童が大変を占める活発なクラスである。リーダー性のある児童や、支援が必要な児童と良好な関係を築ける児童も多い。一方で、授業中に座ってられない児童やコミュニケーション能力に乏しかったり、些細なことから殴り合いの喧嘩に発展したりしてしまう児童が複数いる。また、座ってられない児童に対して強い言葉で怒ったり、こだわりが強い児童に対してわざと相手を怒らせるような行動を取ったりするなど、支援を必要とする児童への関わり方にも課題が見られた。

5月に行われた体育参観の団体競技では、『台風の目』を行った。3年生5クラスで競い合った。交流学級の児童を交えて練習を重ねてきたが、当日は2位で優勝を逃してしまった。その時に児童たちからは、「練習しても無駄だった。」「足遅いやつのせいだ。」「優勝したクラスは交流の友達いないからじゃない。」などの言葉が飛び交った。

このような学級の児童の様子から担任として、毎年2月に本校で開催する長なわ跳び大会への挑戦を通して、最後まで挑戦したり全員で目標に向かって取り組んだり、勝敗にかかわらず頑張り続けたことについて自信を持てるような経験を積んでほしいと考えた。

そして、児童に最後まで諦めずに練習してほしい、みんなで一致団結して1位を取ってほしい、1位を取れなくても誰かを責め立てたり無駄だったと言ったりするようなことがなく練習過程を大切にしてほしい、特別支援学級の友達も交えて全員で挑戦してほしいという思いを実現するため、学級活動を取り入れながら長なわとび大会に向けて挑戦することにした。

2 なぜ長なわ跳び大会なのか？

- ①学級全員の参加を原則とする。(ただし、けがや病気でやむを得ず参加できない場合はその限りではない。)
- ②なわを回した状態から計時係が号令をかけてスタート。
- ③回し手の一方は教師でもよい。(回し手の1人は児童とする。)
- ③一人ずつ入って、跳んで、抜ける(8の字跳び)。
- ④なわが引っかかって跳べなかったり、跳ばずに通り抜けた場合は回数に数えない。

また、平行してWeb長なわ大会が行われていた。ルールは校内での長なわ大会と同様であり、宮城県の3年生と競い合うものである。

Web長なわ大会とは、体力・運動能力向上センター事業の一環として、県内の児童生徒がウェブ上で自己の記録と向き合ったり、仲間と関わり合いながら協力して競い合ったりすることで、運動への意欲の向上を図り、運動習慣の確立につなげることを目的に開催している。「継続して実施する種目の長なわ跳びは、仲間と一緒に活動することとおして、学級の絆を育むことができる」とある。(Web運動広場～長なわ跳び大会～より)

3 長なわ跳び大会に向けて【実践の方針】

最後まで諦めずに挑戦し続け、1位を目指すための取り組みとして、以下の方針で取り組んだ。

- ・学級活動の充実
- ・学級活動でリーダーの選出
- ・特別支援学級の児童が参加できるための環境調整
- ・個人分析と個別支援
- ・練習風景の録画、分析

4 長なわ跳び大会に向けて

(1) 3年3組は31人で挑戦【学級活動①】

2月中旬の校内長なわ大会での優勝を目指し、練習を開始する前日の1月11日に学級活動を行った。

前年度も長なわ跳び大会を経験していた児童にルールを説明すると、学級のリーダー的存在のA児から「学級全員の参加ということは、特別支援学級の2人も入れて(以下B児、C児)31人だね。B児は俺らが一緒に練習する。任せてほしい。C児は(集団に入ることが苦手だったため)先生フォローお願い。」といった発言があった。中には、「3年3組だけでやった方が優勝できると思うよ。」といった発言も聞こえてきたが、

A児が「それじゃあ意味がない。B児、C児がいての3年3組だ。」と言った。その発言を聞いて、クラスの児童も「確かにね。みんなで頑張ろう。」と賛同した。様々な実態の児童がいる中で、B児やC児も共に挑戦することに不安を感じていた筆者だったが、A児の発言やそれを聞いた児童の発言から、「一緒に挑戦していきたい。」と強く思うようになった。そして、B児、C児も含め、全員で円陣を組み、長なわ跳び大会に向けての優勝を目指した第一歩であった。

(2) 俺らならできる【学級活動②】

練習を開始した当初は、業間休みと1日1時間体育の時間に練習を行っていた。練習開始から1週間たったころから、練習を重ねても跳べない児童が攻撃されるようになった。練習に意欲が持てず参加しても跳べない児童を攻撃したり、その攻撃に反発したりして喧嘩に発展することが見られるようになった。また、運動が苦手な児童（以下E児）も跳ぶことができなかつたり、回っている縄の中に入ることができなかつたりした。そして、特別支援学級在籍のB児も跳ぶことができずに体育館の中で遊びだしてしまうなど学級全体がバラバラの状態だった。

全員が同じ方向を向いて練習をしてほしいという筆者の思いから1月19日に「みんなが監督だったら・・・」と題して、学級活動を行った（図1）。

「皆さんは野球強豪校の監督です。部員は3年生9人しかいません。でもその9人はとても強いです。みんなで戦えば甲子園に行けます。しかし、エースが怪我をしてしまいます。このままでは試合にすら出られません。そんなとき、1人の助っ人がきます。でもその助っ人は野球をやったことがありません。助っ人なのに何もできません。他の助っ人を探しても誰もいません。試合までは1ヶ月しかありません。甲子園に出ることだけを夢見て練習をしてきました。みんな3年生なのでこの試合に出なければ引退です。あなたは監督です。この状況をどうしますか？」

補足説明：新たな助っ人は呼ばれません。エースは戻ってこれません。

図1 「みんなが監督だったら・・・」

児童に監督になるように投げかけた。まずは個人で考え、その後グループで話し合ってもらった。悩みながらも児童が出した返答は、「一緒に頑張ろう。」や「みんなで頑張る。」などの言葉だった。グループで話し合っていていくうちに、隣のグループと合体して話し合いを深めたり、B児とC児の意見にも耳を傾けたりしながら話し合うグループもあった。様々な考えが出てきたが、「諦める」と答える児童はいなかった。

話し合いが進み、「長なわと一緒にじゃないかな。」というつぶやきが聞こえた。苦手な人もいる中で「全員」でやらなければならないので、「みんなで頑張らなければ意味ないよ。」という意見も出た。「2回目の出発だ。

俺らならできる。」というA児の発言からみんなで円陣を組み、再出発した。バラバラな状態だったクラスがまた1つにまとまっていくように見えた。

みんなで優勝目指してあと一ヶ月だろうが練習して甲子園に出る	みんな(8人)がスケットに1か月おしえるぶんまでおしえてがんばる。
あたらしくはいった人とつくんいままでとつくんしてきた人ももつとつくんチームだんけつ	みんなで毎日練習 「コツもしくは、自分で練習」させる とにかく諦めない!!
「頑張て」という言葉をかけて練習させる。	「頑張ろうね」と言って一緒に頑張る!!
元々の8にんで、助っ人を毎日練習してできるようにする	がんばろうしっばいしてもいいからがんばってみよう!

図2 児童たちの返答

学級活動「みんなが監督だったら・・・」をしたことによって、跳ぶことができない児童に対して「一緒に頑張ろう。」「こうやるんだよ。」など前向きな言葉が掛けられるようになった。しかし、一斉練習だけでは、技術面での向上は見られない児童がおり、記録もなかなか伸びなかった。

(3) 運動が苦手なE児でも【個別支援①】

E児は筆者の担任する児童であり、体を動かすことが苦手である。また、運動をすること自体に嫌悪感を抱いており、腹痛を理由に学校を休みがちだった。

E児の個人分析を表1に示す。E児は、タイミングを掴むのが苦手であり、「はい」とタイミングを伝えるも、入ることができず、タイムロスにつながった。そうするうちに、跳ぶことができないので「練習したくない。」と言い、欠席が目立つようになったことから、安心して練習できるように集団ではなく筆者と数人の友達で練習を繰り返した。計測するわけではないので、時間がかかってもE児のペースで跳べる環境が用意されたことで少しずつ跳べるようになってきた。跳べるようになり自信が付き欠席も減ってきたところで、集団での練習への参加を促した。

「友達に押ししてもらいたい。」というE児の発言から、H児に押しもらおうと見事に跳ぶことができるようになった。H児は、E児の様子を観察し、「まだ縄に対し恐怖心を持っていて怖いんじゃない。」と言い、心の準備の時間を考慮し、写真1 E児を押すH児タイミングより1秒早く押ししてくれた。（写真1）

嫌なことや不安なことがあると欠席しがちだったが、長なわ跳び大会後は欠席がなくなった。

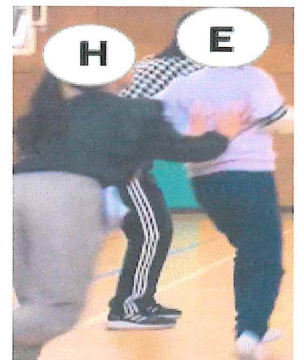
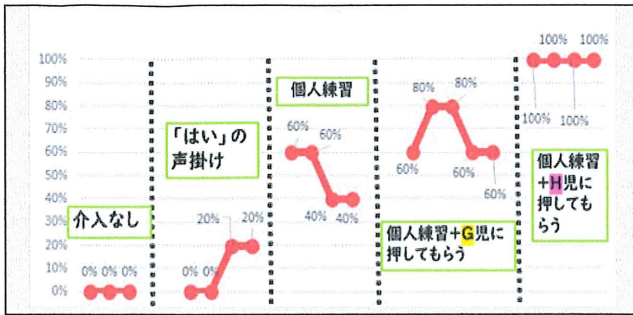


表1 E児 個人分析



(4) 初挑戦の特支学級在籍B児でも【個別支援②】

B児は特別支援学級在籍であり、長なわ跳びを3年生の頃に初めて行った。上手いかなないとやる気がなくなってしまい、練習から逸脱してしまった。

B児の個人分析を表2に示す。タイミングを掴ませようと試みた。まずは、在籍学級で練習も行いながら、3組での練習にも参加した。なわが顔に当たったことから、なわに対する恐怖心が高まり、スムーズに入ることができなかった。そこで、A児に手を繋いで一緒に入ってもらおうと若干跳ぶことができるようになった。

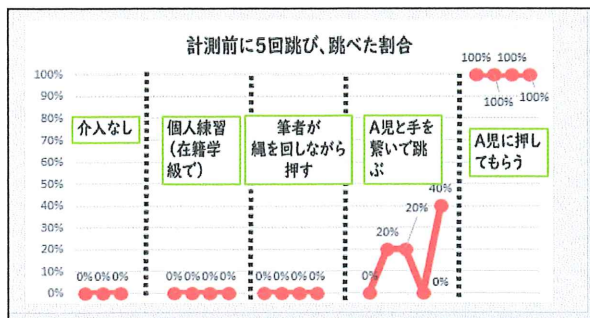
B児の「一人で跳んでみたい。」という発言から、一緒に入るのではなく、A児に押してもらうことにした。(写真2) 一緒に入るよりも押される方がB児にとってタイミングを取りやすいようで、安定して跳ぶことができるようになった。



写真2 B児を押すA児

さらに、B児は「このクラスで優勝したいから休み時間にも練習を一緒にやってほしい。」とA児に直接お願いした。B児が自分から友達に何かをお願いするのは初めてであった。休み時間にも練習を重ねることで、より安定して跳ぶことができるようになった。

表2 個人分析 B児



(5) 悔しい気持ちを悪口に変えるな【学級活動③】

朝、昼休み、放課後にも練習をするようになり、休みの日にも児童同士集まり練習を重ね、苦手だった児

童も跳べるようになり、一気に記録が伸び、常に「200回」以上跳べるようになってきた。誰かが失敗してしまっても責め立てるような言葉がなくなり、「次頑張ろう。」といった言葉が出てくるようになっていた。クラスの雰囲気も良くなり、学年でも1位の記録が続いた。

しかし、他のクラスも練習に励んでおり、2組に記録を抜かれてしまった。

前回とは異なり、3組の児童同士での攻撃はなかったが、抜かれてしまった2組を攻撃するようになった。「ずるしたんじゃないのか。」「交流学級の友達入っていないじゃん。」「頑張っても無駄なことか。」など、体育参観と同じ姿が見られた。

優勝を目指してやってきたからこそここで諦めてほしくはないという思いから、学級活動を行った。今回は筆者が多くは語らずに、児童全員が知っていて尊敬している人も多い大谷翔平選手の言葉をスライドにし、「悔しい経験がないと嬉しい経験もない。」「無理だと思わないことが一番大事。無理だと思ったら終わり。」などの言葉を見せた。A児からは、「みんなが今思っている気持ちは悔しいっていう感情だよ。悔しいを悪口に変えるな。ここで這い上がれなかったらもう負けだ。2組じゃない。自分に負けるんだ。」と言い放った。この言葉を聞いて涙を流す児童もいた。筆者は、「悔しいと思えるということはこれまで必死に練習してきた証である。ここで諦めるか、もう一度踏ん張るか考えてほしい。」と伝え、学級活動を終えた。3時間目筆者が教室に行くと、児童から「もう一度挑戦させてほしい。一緒に練習をやってほしい。このままでは終われない。負けたとしても最後まで諦めずにやりたい。」といった発言があった。児童の気持ちを尊重して、3時間目の授業を変更して再び長なわの練習をすることにした。

(6) さあ、もう1度、優勝目指して【再挑戦】

練習をする前に、筆者がお手本として児童たちに毎日見せていた他校の3年生の映像と自分たちの映像を全員で比べて見た。比べて見ると、いくつかの違いが発見され、お手本のようにミスなく跳ぶための方法が話し合われた。いざ体育館に行き、話し合いで出た並び順を変更したり、回し手を変更したり、掛け声を変えて練習をやってみると「268回」跳ぶことができた。2組は「254回」だったので、逆転した。児童は、挫折を乗り越えての一致団結した練習となった。その後も、自主学習で優勝するためのコツを調べたり、

休みの日に練習したのを動画で撮り、クラスルームで共有したりと練習を重ねていた。

(7) 信じてくれてありがとう【縄跳び大会前日】

縄跳び大会の前日、児童から「諦めずに練習をしてくれてありがとう。できるって信じてくれてありがとう。最初から今日まで信じてくれてありがとう。」という言葉をかけてもらった。その言葉に涙していると、「明日は全力で楽しもう。ここで負けても悔いはないし、やれることは全部やった。努力し続けた俺ら頑張った。」と胸を張って言っていた。児童たちが確実に成長しているのを感じた。

(8) やればできた【長なわ跳び大会当日】

校内長なわ跳び大会当日、インフルエンザが流行し全員で戦うことはできなかった。しかし、参加したメンバーは全力で取り組んだ。結果は「226回」とベストではなかったが、優勝することができ、涙を流す児童も多くいた。負けたクラスにも拍手をし、「すごかった。」などと労いの言葉を掛け合う児童の姿が見られた。



写真3 校内長なわ跳び大会

(9) 大会結果に悔いはない【学級活動④】

宮城県のWeb長なわ跳び大会では、「268回」という結果で2位をとることができた。(写真4)

締め切り当日まで1位であり、児童も1位だろうと期待して帰宅したが、最終の更新で2位になってしまった。翌日、結果を知らせるために学級活動を行った。2位になったことを伝えたら、体育参観や長なわ跳び大会前のような反応があるかと気になった。しかし、涙を流して落ち込んでいた児童だったが、「やれることはぜんぶやった。」「悔いはない。」「来年こそは宮城1位になるぞ。」といった発言が相次いだ。以前だったら「勝つ」ことだけが目的になっていて、「負けてしまったら努力が無駄だった。」と嘆いた児童たちから今回はそのような言葉は一切聞かれず、成長を感じることができた。そして、この長なわ跳び大会に向けやってきたことは無駄ではなかったと筆者自身も強く感じた。

写真4
Web長なわ
跳び大会
最終結果

順位	チーム名	学校名	学年	学級	カテゴリー	最高記録	更新回数
1	大衛小3年3組	大衛村立大衛小学校	3年	3組	26人以上	302回	8
2	歴史に残る3の3	多賀城市立山王小学校	3年	3組	26人以上	268回	4
3	絶対勝つぞ3年2組	多賀城市立山王小学校	3年	2組	26人以上	254回	2

5 長なわ跳び大会後の変容

長なわ跳び大会の後に書いた作文では、「諦めなければ何でもできるようになる。」「練習すればできる。」と、諦めずに頑張りたいとの体験を通して芽生えた気持ちが書かれ(写真5)、その後の学習や生活で諦めずに挑戦する児童が格段に増えた。また、長なわ跳び大会の練習開始日と大会後に実施した「何事にも諦めずに挑戦していますか。」というアンケートでは、特別支援学級在籍の児童含め31名のうち大会前は11名だった「はい」が、大会後は29名と大幅に増えた(図3)。

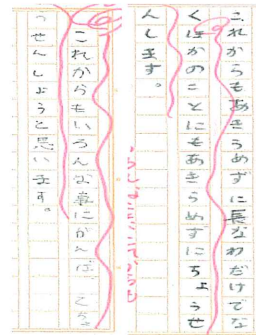


写真5 児童たちの作文

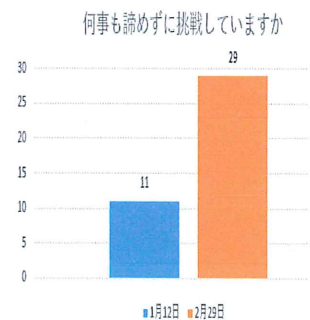


図3 アンケート結果

5 おわりに

長なわ跳び大会を通して、学級全体としての成長をみることができた。また、支援が必要な児童にとって、仲間集団の中で認められたり、受け入れられたりすることで、集団の中で活動することができるようになった。様々な実態の児童がいる学級を作っていく上で大切なことは、集団の中で認められる経験やそれぞれの児童の良さを児童たち同士が理解し合えるような経験を積ませたり、できないことをできるように支援したりして、できるように導いていくことで自己肯定感を育ませていけるように援助していくことである。また、学級を作っていく上で、やり方次第で児童は変容することを身をもって実感した。

今年度知的障害学級を担任し、やる前から諦めてしまったり、どうせできないと言ったりしている児童もいる。昨年度の実践の成果を生かし、特別支援学級の担任としてその子のできることを探り、児童たちが活躍できるように指導に当たっていきたい。